2020年度教育方法・教材開発費採択テーマ

本学における授業改善をさらに促進するために、専任教員を対象として、新たな教育方法および教材開発に必要な費用全般を補助する「教育方法・教材開発費制度」を設置しています。2020年度は、この制度を利用して以下の2件の取組みが行われます。

	開発テーマ	開発体制	
B区分	**「障害者でない者と等しく」学ぶための教材・試験のあり方** 障害者差別解消法にいう「障害者でない者と等しく」学ぶためには何が必要で何が不要か、最も効果的な方法を、全盲学生に適した教材提示・試験実施・図書館等利用方法の開発、及び音声認識アプリによる音声情報の視覚化の実践により明らかにする。	法学部 文化情報学部 神学部 免許資格課程センター 障がい学生支援室	髙杉 直 梶山 玉香 阪田 真己子 関谷 直人 中瀬 浩一 土橋 恵美子（開発協力者） 日下部 隆則（開発協力者）
	学生主体の基礎数学学習支援法の開発 自習支援教材の活用により、反転型授業の推進や学生主体の学習方法の開拓、及び文系学生も含めた基礎数学・データサイエンス分野の学習動機促進を図り、数学基礎力の向上とリメディアル教育支援法の開発に取り組む。	生命医科学部 理工学部	野口 範子 伊藤 利明 宮坂 知宏 近藤 弘一

開発区分にはA区分（50万円以下の補助）とB区分（200万円以下の補助）があり、2020年度はB区分のみ申請がありました。

本制度の詳細を掲載しています。 教育方法・教材開発費制度　https://clf.doshisha.ac.jp/support/development/materials.html

教育方法・教材開発費制度を利用して開発された教材の一部は、本学オープンコースウェア上で公開しています。 同志社大学オープンコースウェア　https://clf.doshisha.ac.jp/opencourse/opencourse.html

COLUMN

大学教育の今　教学マネジメントと志と情熱

本年1月に、中央教育審議会大学分科会から教学マネジメント指針が提示されました。そこでは、現在の高等教育には「何を教えたか」から、「何を学び、身につけることができたのか」への転換が求められており、各大学において質の保証を行うために教学マネジメントの重要性が示されています。教学マネジメントとは、「大学がその教育目的を達成するために行う管理運営」であるとも定義されています。本学でも学長のリーダーシップのもと、ディプロマ・カリキュラム・アドミッションの3つの方針を作成し、学修目標の具体化を行っています。また、それらの評価を行うために、アセスメント・ポリシーも設定しました。

一方、同志社大学は「志」の大学であります。新島襄は、「一国を維持するは、決して二、三英雄の力に非ず。」「自治自立の人民を養成するに至っては、是れ私立大学特性の長所たるを信ぜずんば非ず」と「同志社大学設立の旨意」にて述べています。それぞれが個々の志を持ち、自治自立することが、国を支える「地の塩」となることができるのです。教職員と学生双方に、それぞれの志が求められています。さらに、その志には熱い情熱が必要です。これらの志と情熱は、学長や教職員が設定し管理できるものではなく、個々の思いが必要です。開学以来良心を持って行ってきた伝統であると思います。

学習支援・教育開発センター所長　廣安 知之

2019年度スタッフ一覧

所長	廣安 知之
准教授	宮田 尚子
	澤 宏司
	辻 高明
助教	矢内 真理子
アカデミック・インストラクター	趙 智英
	岩﨑 友明
事務長	瀬川 真理
係長	野田 宣彦
係員	鈴木 梨加
	山口 夏奈
契約職員	野口 奈々

CLF REPORT
Center for Learning support and Faculty development report

「シーエルエフ レポート Vol.31」
同志社大学 学習支援・教育開発センター レポート

発行日：2020年3月31日
発行者：同志社大学 学習支援・教育開発センター
京都市上京区今出川通烏丸東入　明徳館1F
[Tel] 075-251-3277 [Fax] 075-251-3025
[E-mail] ji-kyoik@mail.doshisha.ac.jp
https://clf.doshisha.ac.jp/

CLF REPORT

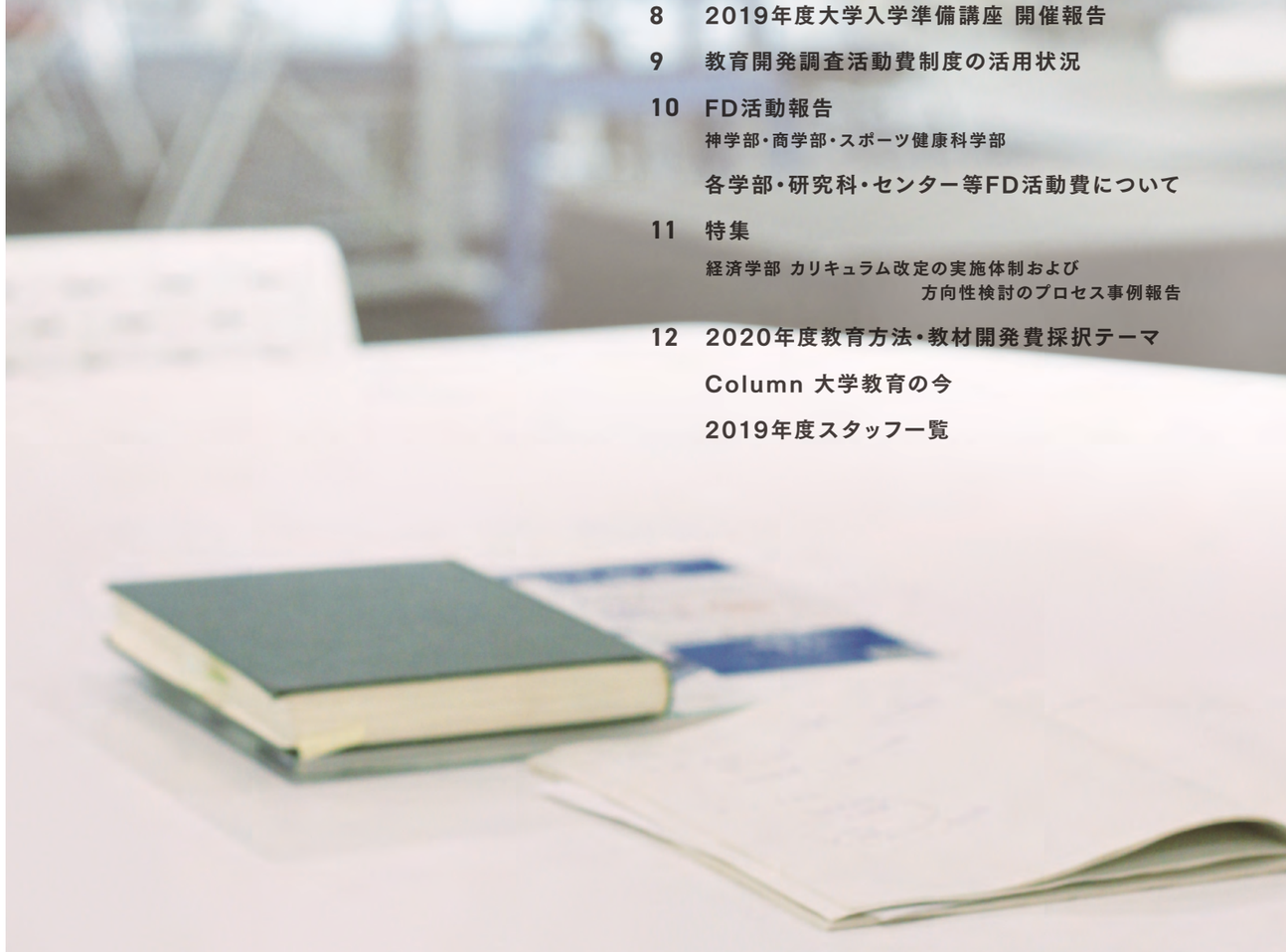
同志社大学
学習支援・教育開発センター レポート

Center for Learning support and Faculty development report

Vol. 31
2020.3

CONTENTS

2 学習支援・教育開発センターについて
3 開催報告
2019年度 新任教員研修会
2019年度 TA研修会
4 ラーニング・コモンズの運営について
6 2018年度「キャンパスライフに関するアンケート調査」集計結果
8 2019年度大学入学準備講座 開催報告
9 教育開発調査活動費制度の活用状況
10 FD活動報告
神学部・商学部・スポーツ健康科学部
各学部・研究科・センター等FD活動費について
11 特集
経済学部 カリキュラム改定の実施体制および方向性検討のプロセス事例報告
12 2020年度教育方法・教材開発費採択テーマ
Column 大学教育の今
2019年度スタッフ一覧



学習支援・教育開発センターについて

設置の趣旨

本センターは、本学における全学的な学習支援施策の企画及び実施、全学的な教育施策の企画及び開発、教育活動の継続的な改善の推進及び支援により、大学教育の充実と発展に寄与することを目的として設置されています。

事業内容

1. 全学に共通する学習支援プログラムの企画及び実施
2. ラーニング・コモンズの運営及び管理
3. 全学に共通する教育システムの企画及び開発
4. 教育内容・方法の改善に関わる全学的な企画及び推進
5. 全学に関わる教育効果の評価方法の開発及び実施
6. 教育活動の支援体制の整備
7. 大学教育に関する図書、資料などの収集
8. その他必要な事項

2019年度設置部会

各事業について専門的に検討するため、2019年度は以下の部会を設置し、取り組みを推進してまいりました。

FD支援部会

設置目的

教育内容・授業内容の改善を推進するとともに、教育効果に関わる全学的な企画を検討する

活動報告

2019年度は計4回の部会を開催しました。部会での懇談や審議を経て、シラバス整備方針について、高等教育の修学支援施策における機関要件充足のための対応、及び前回の機関別認証評価での指摘事項への対応を中心に再整備することができました。また、「キャンパスライフに関するアンケート調査」について、学生に対する調査結果のフィードバックを開始することもできました。

その他、教育方法・教材開発費制度の見直しや、新任教員研修会、TA研修会、学生による授業評価アンケート、大学入学準備講座の実施方針の決定も部会を通じて行いました。

学習支援検討部会

設置目的

学習支援活動や学習支援環境（ラーニング・コモンズ等）の運営方法を検討する

活動報告

2019年度は計2回の部会の開催に加え、本学における学習支援活動の充実のために全学的に検討が必要となる事項や、前年度からの検討課題について、部会委員で構成される以下3つのワーキング・グループを設置して検討しました。

① 良心館ラーニング・コモンズ学習支援検討ワーキング・グループ
② ラーネッド記念図書館
ラーニング・コモンズ学習支援検討ワーキング・グループ
③ 入学前教育検討ワーキング・グループ

各ワーキング・グループでは、メンバー同士での意見交換や現場へのヒアリングを行い、アカデミックイングリッシュのニーズへの対応、ラーニング・アシスタント（LA）の採用方針、学習相談、アカデミックスキルセミナー、コモンズカフェ、ラーニング・コモンズツアー等の学習支援プログラムの改善方法等について検討を行いました。

開催報告

2019年度 新任教員研修会

2019年度新任教員研修会を4月2日に開催し、2018年度途中と2019年度4月に採用された新任教員51名の参加がありました。

研修会では①ガヴァナンス、意思決定の仕組み、②教育活動、③グローバル化の取組み、④学生支援体制、⑤研究活動、⑥入学試験業務、⑦教育・研究倫理について、各所管の機構長、所長、室長より説明いただきました。

研修会終了後に回収したアンケート調査の結果からも、研修会の内容が好評であったことがうかがえます。

教職員のページ（本学教職員のみ閲覧可能）に、研修会の動画・資料を公開していますので、ぜひご覧ください。

新任教員研修会の様子　51名の参加がありました。

参加者の声（アンケートより）

法人全体、大学の方向性を理解することができ、業務にスムーズに取り組める準備となりました。

どのお話も今後の教育研究活動において大変貴重なことであるため、すごく勉強になりました。困った時に相談できる窓口についてご案内を頂けてよかったです。

教育において学生一人ひとりを大切にしなければならないということが伝わりました。また教員としてそのことを日々意識しながら教育活動に取り組む必要があることも理解できました。

同志社大学の教育・研究環境について理解が深まりました。ありがとうございました。

2019年度 TA研修会

2019年度TA研修会を4月4日・5日・8日に開催し、3日間合計で546名の参加がありました。

研修会では、TA制度の定義・目的、TAの業務内容・心得、キャンパス・ハラスメントの防止、TAの事務手続き等についての説明のほか、TA経験のある若手教員や大学院生からの体験談をお話いただきました。

研修会終了後に回収したアンケート調査では9割以上の参加者から「参考になった」と回答がありました。

また、研修会に参加し、アンケートに回答した学生には受講証明書を交付しており、指導されるTAの研修会参加確認に利用していただけます。

TA研修会の様子　3日間の開催で合計546名の参加がありました。

参加者の声（アンケートより）

学部生時代にSAをしていましたが、SAとTAの違いが分かって良かったです。今後はTAとしての自覚を持って業務に取り組んでいきたいです。TAの立場をしっかり理解しつつ、学部生とも関わっていこうと思いました。

TAを行うために必要な心得をしっかりと学ぶことができた。学生ではなく、先生として責任を持って行動したいと思う。

TAが普通のアルバイトとは違うことが良く分かった。授業を受ける学部生にとってTAは教員の1人であるという意識を持たないといけないと思った。

TAは単なるアルバイトではなく、教育の一旦を担っているのだというお話を聞き、改めて身の引き締まる思いになりました。体験談では、どうしたら良いのか、何をしてはいけないのか、はっきりと説明していただけたので、分かりやすかったです。

研修会の動画・資料を公開しています。　TA研修会　https://clf.doshisha.ac.jp/ta/ta.html

ラーニング・コモンズの運営について

開設2年目、ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズの様子

2018年4月に開設したラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズは、2年目の2019年度も多くの利用学生に恵まれた1年となりました。その運営は全体がひと目で見渡せるワンフロアの特性を生かしたものとなっています。ゆったりとしたジャズが流れる室内は、机を自由に寄せ合い、友人と勉強する学生であふれます。聞けば「ひとりで勉強派」は図書館、「みんなで勉強派」はラーニング・コモンズとすみ分けがなされているそうです。

理系学部が主のキャンパスらしく、可動式のホワイトボードや自由に利用可能なモニタ、電子黒板には数式やグラフが表示されています。これら機器の利用頻度は4月から徐々に増え、利用方法の自然な進化が見られました。

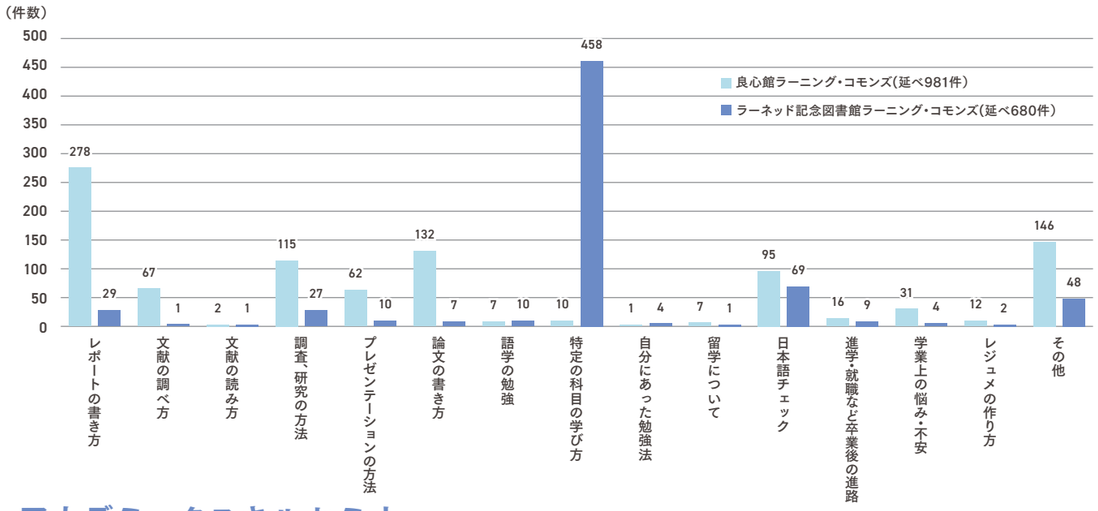
フロア中央に位置するアカデミックサポートエリアでは常駐のスタッフやラーニング・アシスタント（LA）による学習相談が行われています。2019年度の相談件数680件（1月末現在）は昨年度の総数623件を上回っています。相談内容は「特定の科目の学び方」が圧倒数を占め、これは2018年度と同様の傾向です。数学やプログラミング、各学科の専門科目に関する具体的な相談が利用学生に望まれているようです。同じくフロア中央にいる機器利用サポートスタッフ（通称：紺ジャン）や受付スタッフとあわせて一体感のある運営を目指しています。

良心館ラーニング・コモンズの学習相談

良心館ラーニング・コモンズの学習相談で2019年度最も多く寄せられた相談は「レポートの書き方」についてでした。さらに具体的に示すと、引用・出典の記載の仕方、形式面の確認、論理が飛躍していないか第三者の目から見てもらいたい、などの相談が寄せられました。2019年度は例年とは異なり「その他」が146件と増加しており（2018年度45件、2017年度84件）、その内訳はパソコンの操作や、学内の印刷システムであるDoKoDeMoプリントや、e-class、DUETなどの学習支援システムの利用法にまつわる相談でした。「論文の書き方」については、特に卒業論文に関する相談が多く寄せられ、アカデミックサポートエリアが初年次のみならず、上級生にも広く利用されていることがうかがえます。

ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ　学習相談の様子

両校地学習相談の内訳（2019年4月～2020年1月）



アカデミックスキルセミナー

良心館ラーニング・コモンズでは、3階ワークショップルームで、春学期（4月15日～7月11日、延べ36回）と秋学期（10月16日～1月22日、延べ32回）にアカデミックスキルセミナーを実施しました。参加者は延べ771人でした。

2019年度は、これまでに実施してきた「レポートの構成法」「引用の方法」「ノートの取り方」「プレゼンの構成法」などに加えて、秋学期に「やりなおし数学」「統計 基礎の基礎」「留学生のためのレポート構成法」を新たに設けました。「やりなおし数学」「統計 基礎の基礎」は文理融合型のセミナーとして開催しましたが、参加した文系学生から好評を得ることができました。「留学生のためのレポート構成法」は、「類語辞典の使い方など、普段先生に聞けない情報があって役に立った」（アカデミックスキルセミナーアンケートより）などの感想が寄せられました。

コモンズカフェ

2019年度は、コモンズカフェを計2回、良心館ラーニング・コモンズ2階グローバル・ビレッジで開催しました。第32回では、参加者から学業や就職、今後の人生の不安など、様々な悩みが寄せられ、先生から実体験に基づいたアドバイスをいただきました。第33回では、先生のご厚意で持参いただいた本物の史料を間近で見ながらお話を聞くことができました。参加者の皆さんにとって有意義な時間となりました。

第32回 新学期が憂鬱な貴方へ
—ドイツにまつわる異文化の覗き穴—

日時　2019年4月25日

ゲスト　大谷実 助教（同志社大学 経済学部）

第33回 お公家さんよもやま話
—お武家さんのいざこざ（応仁の乱）ではた迷惑—

日時　2019年5月28日

ゲスト　浜中邦弘 准教授（同志社大学 歴史資料館）

TOPICS　LAの活動について

良心館ラーニング・コモンズ

LAは学習相談以外にも、ラーニング・コモンズの利用の仕方を提示するなど、利用促進のための活動を行いました。4月1日～5月10日にかけて、1日2回、ラーニング・コモンズ利用案内ツアーを実施しました。1回30分でラーニング・コモンズのエリアやスタッフの紹介を行いました。ツアーには延べ79人の学生・教職員が参加しました。

また、LA全員が企画・執筆・編集を行ったラーニング・コモンズの広報誌「コモンズプレス」を、4月と9月に発行しました。4月発行の10号では「ユメみる季節」と題して、4人のLAが新入生に向けてエッセイを執筆しました。9月発行の11号では「タイムマネジメントのススメ」と題して、授業や課題、サークルにアルバイトと忙しい学生に向けたタイムマネジメント術を特集しました。

その他に、ホワイトボードにマインドマップを作成し、アカデミックサポートエリアにマインドマップの紹介とホワイトボードの利用法の紹介を兼ねて掲示しました。複数の利用者が立ち止まって見ていたのが印象的でした。ラーニング・コモンズ内で放映されるサイネージコンテンツとして、学習相談の紹介アニメーションの作成も行いました。スタッフでもあり、大学院生でもあるLAの視点から、創意工夫を凝らした利用提案が2019年度もなされました。

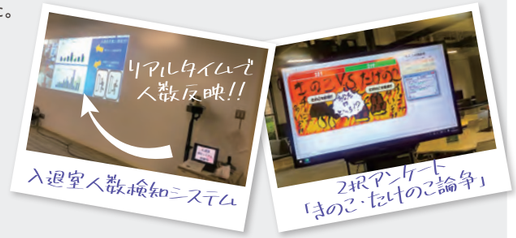
ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズ

LAは学習相談の対応だけでなく、ラーニング・コモンズの環境構築にも携わっています。

ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズのLAは理系の大学院生が大半で、その関与の仕方も理系ならではです。たとえば、赤外線センサーと安価・小型のPC「ラズベリーパイ」を使った入退室の人数を検知するシステムができました。製作したLAは普段は生物音響工学を専門とする大学院生で、その研究の成果が活用された好例となりました。

他にも、大画面タッチパネルモニタとExcelのマクロで作った2択アンケートでは永遠の課題「きのこ・たけのこ論争」を学生に問い、室外で問題、室内で解答を表示し、入室を促した「ラーコモクイズ」では硬軟さまざまな知識が披露されました。学生から最も支持を集めたクイズの1つ「入試時の成績と卒業時の成績」は、文化情報学研究科の大学院生による出題でした。

LAの専門知識を活かした環境構築は、提示物の楽しさと学生の学習意欲の増進、この両方を目論んで企画・運営されています。



2018年度
「キャンパスライフに関するアンケート調査」集計結果

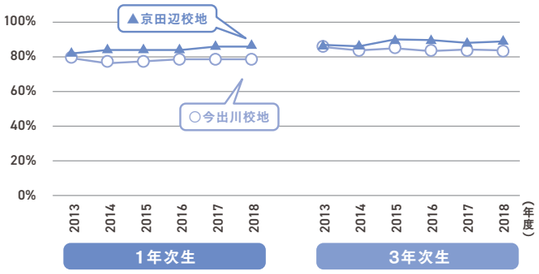
本学では、1年次生全員と3年次生全員を対象に「キャンパスライフに関するアンケート調査」を実施しています。調査を通じて、学生の学びの状況や大学教育に対する評価や受けとめ方の特徴を把握し、より良い教育プログラムを開発することを目指しています。

例年、年度末の3月下旬に調査していますが、2018年度は従来のアンケート用紙による調査と、新しく学内LMS(e-class)によるWeb調査を併用したこともあり、調査期間を3月下旬から5月までに延長しました。最終的に、1年次生の調査で2,765件(回収率43.1%)、3年次生の調査で1,988件(同31.0%)の回答を得ました。

どのくらいの学生が、大学内の学習施設を利用しているのか?

❶ 図書館の利用率

※「日常的に利用した」と「たまに利用した」の回答割合の合計



❷ ラーニング・コモンズの利用率

※「日常的に利用した」と「たまに利用した」の回答割合の合計

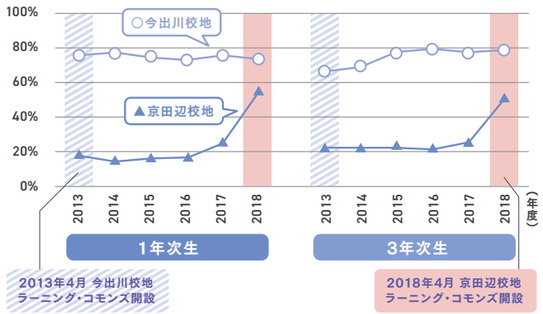


図1　大学内の学習施設の利用率の変化

本学では、創立150周年を迎える2025年に向けて、多様な学生がさまざまな活動を通して共生できるキャンパスづくりに取り組んでいます。その一貫として、学生たちが、授業時間外も大学内で学べる環境の再設計を進めています。

では実際に、学生たちは大学内の学習施設をどのくらい利用しているのでしょうか。図書館とラーニング・コモンズについて、今出川校地にラーニング・コモンズが開設された2013年度以降の利用率を確認していきます(図1)。

図書館の利用率は、6年間を通して高く、学年や校地に拘わらず、7割台後半から9割弱を占めています。

これに対して、ラーニング・コモンズは校地間で大きな差が見られました。今出川校地に通う1年次生の利用率は8割弱と、この6年間、高い水準を維持しています。今出川校地の3年次生についても、2015年度以降、利用率は8割前後を維持したまま推移しています。

京田辺校地に通う学生のラーニング・コモンズの利用率を見ると、1年次生も3年次生も、2017年度までは2割前後に留まっていました。それが、京田辺校地にラーニング・コモンズが開設された2018年度を境に、利用率は急増しています。今出川校地の利用率とは、開きがあるものの、京田辺校地の利用率は5割を上回っています。

ラーニング・コモンズの利用は、“大学での学び”を高めているのか?

授業時間外も大学内で学べる環境の整備は、学生たちの学びとどのように関連しているのでしょうか。ラーニング・コモンズの利用度別に、授業時間外の学習状況(「試験の前に時間をかけて勉強をする」「授業の予習や復習をする」)と、大学への適応感(「大学はいつも退屈だ」)を見ていきます。

まず、1年次生について見ていきましょう(図2)。ラーニング・コモンズを日常的に利用する学生ほど、利用しない学生に比べて、授業時間外にも授業に関する勉強に取り組む傾向にあることが分かります。「試験の前に時間をかけて勉強をする」学生の割合(よくする+たまにする)は、ラーニング・コモンズを日常的に利用する場合には9割近くを占めるのに対して、利用しない場合には7割に留まります。

ラーニング・コモンズでのグループワークの様子

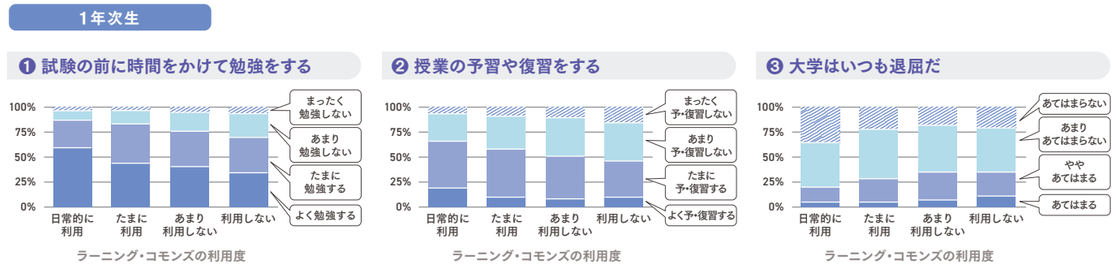


図2　ラーニング・コモンズの利用度別にみた、授業への取り組み状況(①、②)と大学への適応感(③)[1年次]

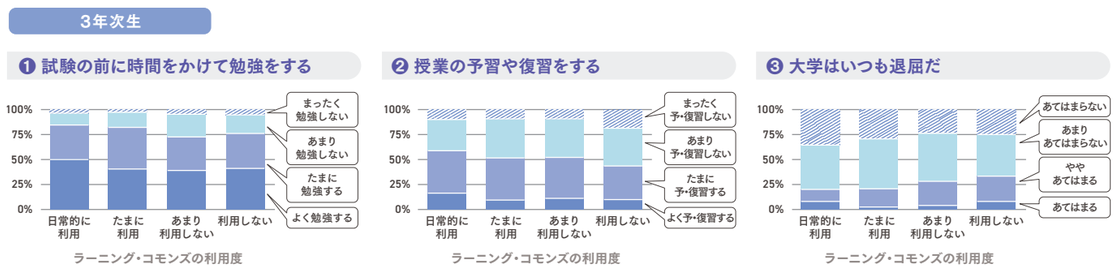


図3　ラーニング・コモンズの利用度別にみた、授業への取り組み状況(①、②)と大学への適応感(③)[3年次]

「授業の予習や復習をする」について(よくする+たまにする)も、ラーニング・コモンズを日常的に利用する学生では6割を超える一方、利用習慣のない学生は5割を下回りました。以上の結果から、学生たちがラーニング・コモンズを、大学内における自習スペースとして活用していることが見て取れます。

また、「大学はいつも退屈だ」と感じ、大学生活にうまく馴染めていない学生の割合は、ラーニング・コモンズを利用しない層ほど高くなっています。これに比べて、ラーニング・コモンズを日常的に利用する層では3割以上が「あてはまらない」と回答しており、大学生活を退屈なものとは思っておらず、ポジティヴに受けとめているようです。

このように、ラーニング・コモンズの利用は、授業時間外の自習を促し、“大学での学び”を高める一助になっていると考えられます。

続けて、3年次生についても調べたところ、ラーニング・コモンズの利用度と授業時間外の学びの関連は、1年次生ほど明確ではありませんが、概ね似通った結果になっていました(図3)。

TOPICS　大学での「学び」と「成長」をセルフチェック!

キャンパスライフに関するアンケート調査の結果をe-class上でフィードバックします

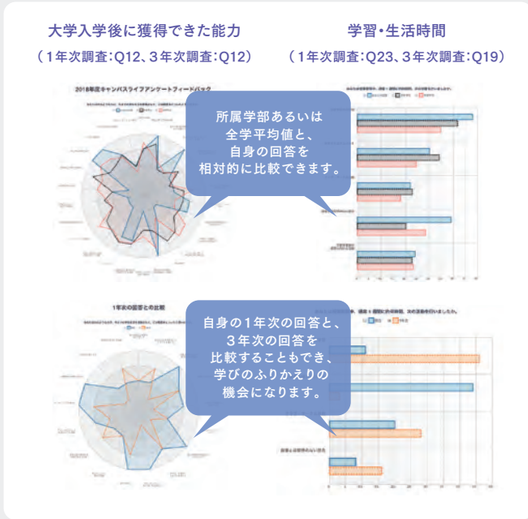
2018年度以降に実施したキャンパスライフに関するアンケート調査について、結果の一部を棒グラフやレーダーチャートを用いて学生個人にフィードバックする機能をe-classに実装し、2019年度11月より公開を始めました。学生はこの機能を活用することにより、周りと自分、あるいは1年次の自分と3年次の自分を比較することができ、学びや成長をふりかえるきっかけになります。

フィードバックの対象者

- e-classで回答した学生
- 調査票で回答時に学生IDを記入した学生

フィードバックの対象項目

右図のとおり、結果を数値化でき、かつ相対比較に適している項目をピックアップしました。



2019年度大学入学準備講座 開催報告

2019年度大学入学準備講座に高校生876人が参加

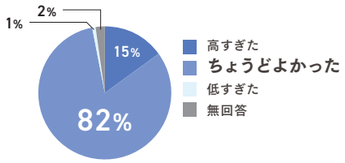
高校生に、大学における必要な学力レベルを知ってもらうこと、正しい学部選択の機会を与えることを目的とし、「大学入学準備講座」を開講しています。この講座では、本学教員がそれぞれの専門分野で扱う学問の内容から高校生が興味を持ちそうなテーマを選んで、大学で実際に行われる授業と同じ形式で高校生に講義を行います。

2019年度は台風19号のため2講座が中止となりましたが、12講座を開講し、29校の高等学校より延べ876名の高校生及び同伴の保護者の方等に参加いただきました。

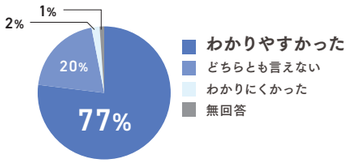
初めて受ける大学の講義にはじめは緊張していた高校生も、普段教科書を中心に学ぶ高校の授業とは異なり、最新の研究データを採り入れた講義や、ニュースでも話題になっている国際問題、政治経済から日常のさりげない事象まで、学問的に掘り下げる講義に大変刺激を受けたようです。終了後のアンケートには、大学で学ぶ意義を考えるきっかけとなった、大学で専門的な研究ができることへの期待が高まった、今まで疑問に思っていた他学部との違いが明確となり学部選択の参考になったなど、たくさんのコメントをいただきました。

アンケート結果

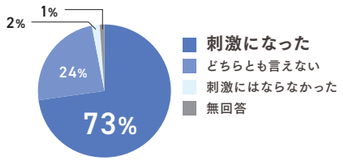
Q. 授業のレベルはどうか？



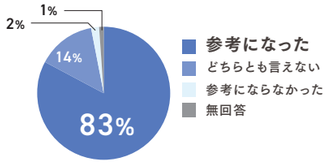
Q. 講師の話し方はどうか？



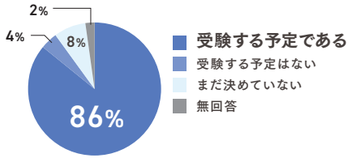
Q. 高校における勉強の刺激になったか？



Q. 学部を選択する際の参考になったか？



Q. 同志社大学の受験を考えているか？



受講者の声（アンケートより）

実際講義を受けたら、おもしろくてびっくりしました。文系・理系の選択に迷っていますが、他の授業も受けて、しっかり進路を定めたいと思います。

話が分かりやすく、専門的知識を持っていなくても授業を楽しむことができた。私たち生徒の参加型の授業で、学部に大変興味が湧いた。将来の選択に迷いがあるため、この授業が参考となった。また、今回学んだ、直感を頼るべきでないことや、集中力を保つ方法を実践しようと思った。

非常に興味深い授業でした。日常の空間やただのモノだと思っていたものをここまで掘り下げ、深く追求するとこんなところまで話が広がるとは思いませんでした。もう一度ききたい授業です。

今まで考えたことがなかったようなことについて色々と知ることができて「学ぶ」だけではなくて「興味を持って調べること」が大切であり、そこから本当の学びが広がっていくのだなということに気づくことができました。

改めて「グローバル化」ということについて考えるよいきっかけとなり、今日の講義を高校の地理や世界史などの授業で習ったことと紐づけながら受けると、より一層言語の奥深さを感じました。

講座を受ける前は大学生がどのような授業を受けているかイメージがつかなかったので不安でしたが安心しました。大学では自分の好きなことについて学べるので楽しそうだと思いました。

講義を集約した議事録を発行しました

過去の講義風景を収録した動画が視聴できます

各講義の概要等、詳細を掲載しています。 大学入学準備講座 https://clf.doshisha.ac.jp/preparation_course/course.html

教育開発調査活動費制度の活用状況

教育開発調査活動費制度とは

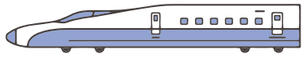
本学の教育の質的向上のための積極的な調査活動を支援するために、本学専任教職員を対象として、教育開発に関する各種学外企画の参加に必要な旅費等の費用補助を行う制度です。補助対象となる催しはメーリングリスト及び、以下のページで紹介しています。

メーリングリストへの登録を希望される場合は
学習支援・教育開発センター事務室までご連絡ください。

研究会・研修会のご案内 https://clf.doshisha.ac.jp/research/research.html

主な参加先

本制度を利用して参加された催しの一部を紹介します。



関西学院大学シンポジウム
「“社会に触れる学び”とこれからの高等教育－ハンズオン・ラーニングの現在地－」
開催年月日 2019年5月11日

グローバル人材育成教育学会 第6回関東支部大会
グローバル・マインドを育てる異文化体験の試み ～東京都英語村で考える～
開催年月日 2019年6月9日

芝浦工業大学 英語による授業のためのワークショップ
開催年月日 2019年7月6日

第21回関西大学FDフォーラム
授業評価アンケートを展望する ―その多様性と可能性―
開催年月日 2019年7月20日

立命館大学 第1回教学実践フォーラム
「論理的思考力・探究力」を育てるアカデミック・ライティング
―言語の枠を超えた「書く」指導のあり方―
開催年月日 2019年8月5日

論理的な文章の書き方は、英語と日本語、いずれの言語にも共通することを確認できた。学部間の学問分野の質の違いは否めないが、基礎的な部分で共通するところが多い。英語と日本語のライティング支援体制を全学で強化する必要性を痛感できた。

参加者の声

滋賀県立大学 学生を授業に参加させる秘訣 ―アクティブラーニングの魅力―
開催年月日 2019年8月9日

自身の授業へアクティブラーニングを組み込むイメージができ、帰着後の講義で実施してみたところ学生に好評であった。研修は終始グループワーク形式で行われ、様々な分野の参加者がディスカッションすることで、自分では気付かない視点や、他の参加者が実施しているアクティブラーニングの方法等を知ることができ、大いに刺激を受けた。

参加者の声

第9回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム
2040年の高等教育をデザインする ―生涯学び続ける学修者を育成するために―
開催年月日 2019年8月22日・23日

慶応義塾大学教育フォーラム
学生の興味がわく実験教育をめざそう！ ―論理的思考力を身につける現代の実験教育―
開催年月日 2019年9月9日

中部大学 第50回FD・SD講演会
アセスメントポリシーに基づく大学教育の質的転換 ―高大接続と社会接続の観点から―
開催年月日 2019年9月17日

福岡大学 第13回教育改善活動フォーラム
カリキュラムのスリム化の意義と課題
開催年月日 2019年10月5日

東京大学ワークショップ
Teaching Naked Techniques: A Practical Workshop on Designing Better Classes
（より良い授業をデザインするための実践的なワークショップ）
開催年月日 2019年11月23日

広島大学 第47回研究員集会
今後の大学教育を考える ―文理融合型教育への期待と課題―
開催年月日 2019年11月26日

日本私立大学連盟教育研究シンポジウム
教育活動の可視化と質向上 ―学生調査とアセスメント・ポリシー
開催年月日 2019年12月11日

令和元年度 県立広島大学教育改革フォーラム
持続的な大学教育の質向上とアクティブ・ラーニング
開催年月日 2019年12月26日

2019年度は延べ約100名に本制度を活用いただきました。
2020年度も、より多くの方の活用をお待ちしています。

本制度の詳細を掲載しています。 教育開発調査活動費制度 https://clf.doshisha.ac.jp/support/action.html

FD活動報告

各学部・研究科・センター等がそれぞれ取り組んでいるFD活動の一部を紹介します。

神学部

キリスト教は約二千年の歴史があり（ユダヤ教、イスラームも同様に長い歴史がある）、また、その学問的活動も歴史が長い。そのため、どうしても授業は座学が中心になる傾向があり、学生からだけではなく、教員からも、座学中心のあり方から、もっと参加型の授業を求める声があがっていた。今年度は、ALL DOSHISHA 教育推進プログラムに採択された「地の塩プロジェクト」が立ち上げられ、社会福祉施設での研修を通して学びを育む授業が展開された。他にも、神学を日常的な事柄にまで落とし込んで、グループでディスカッションをする参加型授業も今年度から始まった。これらの授業は、学生からの評判も上々であり、神学部の教員間でさらに多くの参加型授業の必要性が認識されるようになった。神学部では、FD活動の一環として年度末にリトリートという形で一年間の教育活動を振り返る機会があるが、今後も学生の成長につながる教育とは何かについて議論を深め、学生の声を反映させながら新しい科目を設置していく予定である。

商学部

商学部では、従来から1年次生に対する導入教育に独自の取組みをしており、毎学期末に、導入科目運営委員会（委員長は教務主任）が中心となって同科目を担当する専任教員の間でFDのための会議を催している。授業内容や困っている点を報告したり解決策を全員で検討しあったりして各々の工夫と体験を共有する試みを続けている。

講義科目や演習科目については、これまで研究分野が近い教員同士の個別のノウハウ交換にとどまっていたFDを、2019年度には、学部組織的なものとして拡大した。具体的には、全専任教員を対象に、各自の授業の工夫・取組み・悩みに関するアンケート調査を実施した。また、教授会メンバーの間で、その集計資料を基に、ノウハウの交換を行うとともに、教育上のシステム改善に関する懇談を行って、FDへの取組みを加速している。

スポーツ健康科学部

スポーツ健康科学部は学部開設と同時にFD委員会を立ち上げ、11年が経過した。本学部のFD委員会は教員全員で構成されることで教授会との連動性を高め、小規模学部の特性を活かした組織を構成している。これまでに旧カリキュラムを見直し、新カリキュラムを導入してから7年目を迎えている。本学部では毎年度末に、研究科も併せて自己点検評価を実施し、翌年度の学部・研究科のFD活動への取り組みの骨子を作成するという循環を作ってきている。最近の学部教育プログラムの改革事項として、教員と学生との関わりを4年間に亘ってできるだけ深く維持できるよう、1年次春学期にファースト・イヤー・セミナー、2年次春学期に基礎実習、3・4年次は演習を取り入れてきているが、さらに一歩前進させるため、2019年度より2年次秋学期開講科目として応用演習を複数クラス立ち上げた。2020年度の演習の選考においてはできるだけ学生の希望に沿う形を取るために、各演習クラスの定員の幅をもたせられるよう、仕組みを改善した。今後、「学生による授業評価アンケート」の活用と新たに策定したアセスメント・ポリシーに従った、評価の具体的な方法の検討を大きな課題として捉えている。

各学部・研究科・センター等FD活動費について

学習支援・教育開発センターでは、各学部・研究科・センター等における組織的なFDに関する取組みに対し、FD活動費の補助を行っています。積極的にご活用ください。

FD活動費の使用例

- 各種アンケート調査関連費用
- FD講演会・セミナー等開催関連費用
- 専門的知識の提供に対する謝礼
- FD関連書籍購入費用

※組織の懇親会や親睦会は該当しません。

詳細は、教職員のページ（本学教職員のみ閲覧可能）をご確認ください。

特集

経済学部 カリキュラム改定の実施体制および方向性検討のプロセス事例報告

はじめに

同志社大学経済学部（以下、本学部）では、例年カリキュラム委員会で教学に関する情報共有と課題解決を行い、およそ４年に１回カリキュラムを見直しています。また、8年に1回は学則改定を伴う大幅なカリキュラム改定を実施しています。大幅な改定は２年をかけて行うのが通例で、本稿では、2020年度生向けに2018年度から行ったカリキュラム改定の検討プロセスを報告します。

１．カリキュラム改定を行う組織・体制

学部長を筆頭とする主任会メンバーである教務主任２名を中心にカリキュラム改定の具体的作業を行います。学部内には教学全般を扱うカリキュラム委員会とＦＤ案件を扱うＦＤ委員会学部部会があり、教学とＦＤの両面から検討を重ね、この２つの委員会で審議した内容を教授会に諮ります。

作業を進めるにあたっては、主任会で原案を作成する段階が、カリキュラム改定の根幹ともいえる部分になります。教務主任が教員と調整し、事務組織に足を運んで情報を共有し、職員からも現場の課題の提起に加え、会議等の結果を受けて教員の意思確認や相談を行い、教職協働が起こります。

２．調査等に基づく改定の方向性の検討材料収集

合意形成を行うためには、過去に積み重ねられた変遷の中でカリキュラムがいかに改定されたかという文脈を踏まえて、調査等のエビデンスに基づいて提案することが重要です。方向性を定める調査は、①歴史の振り返り②現行カリキュラムの検証③ニーズの把握と動向調査の３つの観点から行われました（図１）。それぞれの中で行った調査等について、以下(1)から(6)で紹介します。

（１）カリキュラム改定の歴史を紐解く

人材養成目的とディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを確認すると同時に、過去のカリキュラム改定の委員会答申を洗い出す作業を行いました。専門科目や全学共通教養教育科目がどのように扱われてきたのか、卒業に必要な科目や単位の上限の変遷と共に、重視された教育観の変化を理解し、委員の共通認識としました。内部の視点から時系列での情報を整理できました。

（２）学生調査とデータ分析

本学では「学生による授業評価アンケート」、1年次生と３年次生を対象に「キャンパスライフに関するアンケート調査」を実施しています。本学部では授業評価アンケートに基づいて、前回の改定で実施された一部の専門科目の４単位から２単位への変更の検証も定期的に行われていました。また、一時期実施していた外部と連携した学生調査も活用しました。それらのデータについて、学習支援・教育開発センターの教員に分析を依頼し、履修動向などを確認しました。また、その結果はＦＤ講演会として報告され、本学部教員のあいだで情報・課題意識を共有しました。

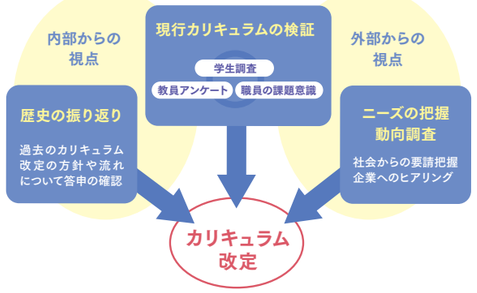


図１　カリキュラム改定検討材料収集概念図（筆者作成）

（３）社会的な背景とニーズ

人材養成目的を検討するために、どのような人材を輩出することが期待されているのか、社会的なニーズも把握しました。文部科学省や高等学校、民間企業などにヒアリングに行き、その結果を委員会で共有しました。

（４）他大学や他学部のカリキュラム確認

学外の動向を調査するために、熱心な取り組みを行う他大学もヒアリングしました。また、他大学の経済学部のカリキュラムについて、比較可能な形式に直した資料も入手しました。他大学のカリキュラムの在り方と共に、見せ方や履修の方法を把握し、望ましい形について、近接領域である本学商学部のカリキュラムも確認して検討しました。

（５）教員へのアンケート調査

授業をつうじて日々学生と接している本学部教員にもアンケートを実施しました。通常では見えてこない、担当科目や学問領域の課題意識や改善のヒントが得られました。

（６）職員の課題意識の確認

カリキュラムを運用面で支え、学生の色々な声を拾う機会のある職員も課題を出し合い、一覧化しました。職員は卒業判定をシステムのみではなく、目でも確認するため、学生の科目履修の全体像を肌感覚で身に付けています。何百もの履修の履歴やどの単位が修得不足で留年となるかについて、全体像を把握しているため、個別の科目を見る教員と異なる視点を持っています。その他、運用が難しい科目や煩雑で学生にわかりにくい点について意見をまとめ、提案しました。それらを教務主任と共に分類して資料にまとめて課題を提示しました。

３．カリキュラム改定の方向性

上記の(1)から(6)の調査分析を前提として、各種会議で検討を重ねた結果、カリキュラム委員会による中間報告および概念図（図２）が完成しました。

おわりに

カリキュラム改定後は、実際の運用をつうじて、次期改定に向けて、新カリキュラムを検証し、そのアセスメントによって評価・改善されていきます。しかし、事後的に振り返る際に、カリキュラム改定の方向性を決定する具体的なプロセスに着目することはあまりありません。カリキュラム改定という２年間のプロジェクトによって得られた、教員や職員の能力開発（ＳＤ）の側面にも着目すべきものがあったと思います。

今回は、組織体制や、調査を中心に事例を報告しました。この報告が今後のカリキュラム改定の一助になれば幸いです。

菅一城（経済学部 教授）
池口真梨子（同事務室 教務係長）

図２　2020年度生向けカリキュラム改定の骨子（改定の概念図）
※スペースの関係から一部記述を省略しています